

水曜通信36

東北学院宗教センター編

2024年
4月

第71回 水曜公開礼拝

2024年4月17日(水) 18:30-19:00



<礼拝次第>

前奏：H.シャイデマン作曲

《キリストは死の縄目につながれたり》

讃美歌：第二編 55番「主イエスは死に勝ち」

聖書：ヨハネによる福音書 16章23-28節

讃美歌：第二編 163番「主イエスのみ名こそ」

説教：「常世の光」

頌栄：545番「ちちのみかみに」

後奏：J.S.バッハ作曲

《われらの救い主なるイエス・キリスト》BWV626



説教
宗教センターチャプレン
佐藤 由子



奏楽・第2部演奏
本学文学部教授
椎名 雄一郎

後奏の後、椎名雄一郎氏（本学文学部教授）によるオルガン演奏による賛美を行います。

次回第72回水曜公開礼拝は5月15日です。

第70回 水曜公開礼拝報告 (説教：野村 信、奏楽：菅原 淑子)

2024年2月21日 (水) 18:30 - 19:00

讚美歌：37A番「ゆうひはしずみぬ」
聖書：ヘブライ人への手紙 11章8-22節
讚美歌：352番「あめなるよろこび」
説教：「神の輝きの内に」
頌栄：543番「主イエスのめぐみよ」



【説教要旨】

ヘブライ人への手紙11章8節に、「信仰によって、アブラハムは、自分が受け継ぐことになる土地に出て行くように召されたとき、これに従い、行く先を知らずに出て行きました。」とあります。ヘブライ書の著者は、アブラハムが向かったのはカナの地ではなく、天の故郷へ向かう旅をしていたと語ります。16節に「天の故郷にあこがれていた」と解説がつけられています。つまり、地上の旅は、天に向かう旅なのです。こうしてみると、多くの信仰者たちが、なるほど地上ではそれぞれの目的地がありました。が、究極的には神のもとに向かう旅をしました。しかも、天の故郷を見上げるたびに、喜びが湧いてきました。13節に「はるかにそれを見て、喜びの声をあげ」とあります。天の故郷は目では見えませんが、信仰の目で、すなわち霊的な目で見つめる時、喜びが湧いてきて、天の喜びを先取りすることになります。これは今を生きる私たちにとっても大切なことです。(宗教センターチャプレン 野村 信)

前奏：J.S.バッハ作曲 オルガン小曲集より『おお人よ汝の大なる罪を嘆け』BWV622

この曲は、全46曲からなる「オルガン小曲集」に含まれており、バッハが手がけたコラール前奏曲群の中でも特に重要な作品です。ルター派の讚美歌「おお人よ、汝の大なる罪を嘆け」を基に、キリスト教の受難節の悔い改めと救いを音楽で表現しています。キリストの犠牲と救いの深遠なメッセージが込められており、バッハの信仰への洞察がこの作品には顕著に現れています。

後奏：J.S.バッハ作曲 コラール変奏曲『恵み深きイエスを迎えん』BWV768 I・X・XI

この曲は同名のコラール旋律を基にして一連の音楽的变化を施したバルティータで、11の変奏が次々と展開していきます。このバルティータでは、バッハがコラール旋律を多角的に探究し、対位法、和声変化、リズムや装飾的なフレーズなど、さまざまな手法を用いて豊かに表現しています。バッハの深い宗教的信念と、技術的かつ深い表現力を持つこの曲は、彼のオルガン音楽の中でも際立った作品です。(礼拝オルガニスト 菅原 淑子)



礼拝とその後の19時00分から30分までの菅原淑子氏によるオルガンによる賛美に50名の方が参加されました。

礼拝後、音楽による賛美 (合唱：レトウス・ヴォーカル・アンサンブル、オルガン：菅原淑子)

1. J.S.Bach作曲 Kantate BWV 147 'Herz und Mund und Tat und Leben' より
Jesus bleibet meine Freude (イエスは変わらざる我が喜び) (若松正司編曲)
2. A. Vivaldi作曲 RV589 'Gloria in D'よりLaudamus te (我ら御身を讃え)
3. A. Vivaldi作曲 RV589 'Gloria in D'よりDomine Fili unigenite (御ひとり子である主) (D. Ratcliffe編曲)
4. G.B. Pergolesi / J.S. Bach作曲 BWV 1083 'Tilge, Höchster, meine Sünden' (Stabat Mater) より
Tilge, Höchster, meine Sünden (我が罪を拭い去りたまえ、いと高き神よ)
5. G.B. Pergolesi / J.S. Bach作曲 BWV 1083 'Tilge, Höchster, meine Sünden' (Stabat Mater) より
Amen (アーメン)

「主よ、人の望みの喜びよ」としても知られる、J.S.バッハ (1685~1750)「イエスは変わらざる我が喜び」は、カンタータ第147番『心と口と行いと生活で』の終曲に配されたコラールです。印象的な器楽パートの旋律が言葉で言い尽くせない喜びと愛を奏でます。

A. ヴィヴァルディ (1678~1741)『グローリア』は人気の高い宗教的合唱作品です。「我ら御身を讃え」では賛美の言葉を連ねる意味が際立ち、「御ひとり子である主」では、イエスへの信頼が躍動的な旋律によっていきいきと歌いあげられます。

J.S.バッハ『わが罪を拭い去りたまえ、いと高き神よ』は、G.B.ペルゴレージ (1710~1736)『悲しみの聖母』が原曲で、詩編51番のテキストをあてるなど種々の変更がなされた作品です。終曲「アーメン」における同主長調セクションの追加によって、本作品は光に包まれるように幕を閉じます。

(LVEディレクター 八木 美華)



東北学院キリスト教フェローシップ (TGCF2024)

2024年度の大学でのTGCF活動は、新入生の方々をお迎えし、大学生による企画・運営イベントを予定しております。English Caféにつきましては、今年度も宣教師の方々にご協力をいただき、学内留学・学部間交流の機会となることを願い、毎月最終木曜日15時から開催いたします。

新たな試みとして、TGCF73ランチ（ななさんランチ@7号館3F宗教センター別室）を毎週木曜日に開催予定です。English Café講師である宣教師の方々をゲストにお迎えし、日本語/英語のフリートークを中心に、日々の歩みのヒントを聖書から見つけることができればと願っております。

また今年度はTGCFの活動が大学から各学校へと広がる機会が与えられるようにと願っております。東北学院に繋がる方々の交わりが、さらに豊かになりますように、共に祈りに覚えていただければ幸いです。
(宗教センターチャプレン 佐藤 由子)



TGCF ENGLISH CAFE

学内留学 学部間交流

宗教センターHP TGCF INSTAGRAM

THURSDAY 15:00-16:30

4/25, 5/30, 6/27, 7/25

会場：土樋 コラトリエ・リエゾン

— 建築が語る東北学院の歴史 (27) —

建築主の思想を体現し、しばしば「社会を映す鏡」とも形容される建築には、それが建った時代の社会・制度・技術・価値観などが色濃く投影されます。逆に、長い年月を生き抜いた歴史的建築を見ると、私たちは時間を越えて先人の営みに想いを馳せることができます。この連載ではそうした視点から、建物やキャンパスを主役に据えて東北学院の歴史を切り取ってきました。2021年4月に始まった連載は、3年26回を数えました。4年目もどうぞよろしくお願いいたします。

さて、新年度のスタートに相応しい吉報が3月15日に届きました。東北最古級のプロテスタント教会の一つで、東北学院とも深い関わりを持つ岩沼教会の建物が（1930年竣工）国の登録有形文化財に登録されることに決定したのです。2022年よりゼミの学生たちと一緒に建物や史資料の調査に取り組み、昨年9月の小誌30号で概要を紹介させていただいた建物です。3月16日の読売新聞に、本院にもお力添えをいただいている平賀真理子牧師のコメントと建物の写真が掲載されています。石造の重厚な外観と軽やかな内部空間が特徴的な、県内唯一の歴史的石造教会です。お近くに行かれた際にはぜひお立ち寄りください。当時の人々に想いを馳せ、94年に及ぶ歴史の重みを感じただけですと幸いです。
(工学部 崎山 俊雄)



図1 正面外観（2023年9月崎山撮影）



図2 礼拝室内観（同左）

ランカスター神学校との国際シンポジウム・講演会報告

去る2月6～7日の二日間にわたり、宗教センター主催による国際シンポジウムと講演会が、ランカスター神学校からアン・タイヤー教授をお迎えして行われました。当初、リー・バレット教授も来日を準備していましたが、健康上の理由により辞退され、発題と講演の原稿を寄稿していただき、両日とも代読による参加となりました。

開会礼拝では、讃美歌312「慈しみ深き」を英語で共に神を賛美し東北学院のスクールモットーである「LIFE LIGHT LOVE」を聖書の言葉から再確認することから始まりました。初日のシンポジウムのテーマは「ランカスター神学校と東北学院」。アン教授の発題講演は「移住した人々の及ぼす影響：米国のドイツ改革派キリスト者と彼らの神学校（1890年まで）」と題して、ドイツ系移民団がアメリカでランカスター神学校を設立するに至る歴史的な経緯、またランカスター神学校を中心に形成された「マーサーズバーク神学」とその担い手たちについてお話しくれました。またバレット先生の「ランカスター神学校の受肉論的焦点：マーサーズバーク神学から新正統主義へ、更には先へ」と題する原稿は野村信チャプレンが原稿を代読し、「マーサーズバーク神学」の特徴を丁寧に解説してくださいました。その後、本学の藤野雄大先生が「ランカスター神学校から東北学院へ—その神学的関係性」と題し、ランカスター神学校出身者の宣教師たちが東北学院にもたらした信仰と神学のルーツと特徴について解説していただきました。討議の時間では、タイヤー教授の発題講演に対し、本学の田島卓先生がコメント解説し、バレット教授には本学の渡邊蘭子先生がコメントをするなど、マーサーズバーク神学についての理解を更に深める一日になりました。

二日目の講演では、タイヤー教授が「中世末期から近代初期における罪の赦しの教え：その特徴点」と題して、御自身の専門である歴史神学的な視点から「罪の赦し」の教理と説教の変遷を解説していただきました。バレット教授の講演「現代神学の多様な声：カオスカコーラスか」は原田浩司主任が代読し、今日のアメリカ社会におけるプロテスタント信仰者の特徴や傾向を「冒険家」や「十字軍」といった独特な表現で分類し、その特徴を整理していただきました。

両日とも入念に準備された講演をとおし、特にアメリカ人の視点から東北学院に受け継がれたプロテスタントの信仰と神学の特徴を再認識する貴重な機会となりました。なお、事前に野村チャプレンがお二人の原稿を翻訳してくださったため、英語による講演でしたが、参加者は内容を十分に理解することができました。最後に、今回の国際交流の企画の実現を楽しみにしておられた鐸木道剛先生が病气療養のため当日不在となり、開催後に天に召されました（2月15日）。鐸木先生に改めて心から、感謝と哀悼の意を表し、主なる神の慰めと平安をお祈りします。（宗教センター主任 原田 浩司）



東北学院宗教センター編「水曜通信」
第36号

2024年4月3日発行

〒984-8588 仙台市若林区清水路3-1

発行責任者：宗教センター主任 原田 浩司

東北学院宗教センター TEL：022-354-8310

Email：c.center@mail.tohoku-gakuin.ac.jp